

[資料]

平成 27 年度関門地域共同研究会 成果報告会 ミニシンポジウム「今後の新たな関門連携に向けた展望」開催記録

日時： 平成 27 年 6 月 11 日（木） 14:00～16:00（うちミニシンポジウム 15:15～16:00）

会場： 西日本総合展示場新館（AIM ビル）3 階 314・315 会議室

主催： 関門地域共同研究会

パネリスト：

一般財団法人山口経済研究所 調査研究部長	宗近 孝憲 氏
西南女学院大学観光文化学科准教授	木沢 誠名 氏
北九州市産業経済局観光にぎわい部門司港レトロ課係長	徳山 幸弥 氏
カモンFMパーソナリティ	橋本 みほ 氏
下関市立大学経済学部公共マネジメント学科教授	水谷 利亮
北九州市立大学都市政策研究所准教授	宮下 量久

コーディネーター：

北九州市立大学都市政策研究所准教授	南 博
-------------------	-----

※登壇者の所属は開催当事のもの

1. 趣旨説明

〔北九州市立大学 南 博〕

それでは定刻となりましたので第 2 部のミニシンポジウム「今後の新たな関門連携に向けた展望」を開始させていただきます。私は第 2 部のコーディネーターを務めさせていただきます北九州市立大学都市政策研究所の南と申します、どうぞよろしくお願ひいたします。お手元にホチキス止めした少し厚めのペーパーがございます、これをご覧いただきつつ進めさせていただければと思います。

まず初めにパネリストの皆様をご紹介させていただきます。ステージ中央から、山口経済研究所調査研究部長の宗近孝憲さんです。西南女学院大学観光文化学科の木沢誠名さんです。北九州市産業経済局観光にぎわい部門司港レトロ課の徳山幸弥さんです。下関市のラジオ局カモンFMパーソナリティの橋本みほさんです。それから第 1 部で研究報告を致しました関門地域共同研究会のメンバーから下関市立大学の水谷利亮さんです。同じく北九州市立大学の宮下量久さんです。以上のメンバーで進めさせていただきます。

今回のシンポジウムの趣旨でございますが、ペーパーの一番上のところに「趣旨」ということでお示しさせていただいております。今回のシンポジウムは、地域活性化あるいは地方創生に大きな役割を果たすということが期待されています「産学官」「金融」「言論」そして「住民」といったそれぞれのお立場のパネリストの方をお招きをしております。そして主として、市民交流や教育文化活動、観光面の連携を関門地域の活性化に結び付ける、できれば経済的な活性化も視野に、新たな関門連携に向けた展望を議論しようというものでございます。

限られた時間の中ですので、二つに論点を絞って各パネリストの皆様にご発言をいただきたいと考えております。ひとつは「現在の関門連携の取り組み成果と課題」です。もうひとつは「今後の関門連携充実に向けた展望や期待」。この2点に論点を絞りたいと思います。そして最後にフロアの皆様方とディスカッションの時間を設けたいと思っております。

2. 論点① 現在の関門連携の取り組み成果と課題

〔北九州市立大学 南 博〕

それではひとつめの論点、「関門連携の取り組み成果と課題」に入っていきます。第1部においては、関門連携の現状や課題に関する内容を含んだ報告がございましたが、お手元の資料の3ページ目以降に「関門連携に関するこれまでの取り組み」について整理をしております。例えば3ページ目では、平成19年7月2日に宣言されました「関門連携共同宣言」について、関門の5連携、すなわち「市民交流」「経済活動」「教育文化活動」「交通環境」「行政間」の連携を推進する旨の宣言をお示ししています。そして、それに基づいた取り組みなどについて、次のページ以降に詳細について整理をさせていただいております。説明につきましては省略をさせていただきますが、現在でも様々な連携が行われています。

本日パネリストとしてご登壇いただきました皆様方は、様々な形で「関門連携」に関わっておられます。それでは、各パネリストの皆様方が取り組んでおられる現在の関門連携のご紹介や、感じておられる課題についてご発言をいただければと思います。

それではまず木沢さんからお願いを致します。

〔西南女学院大学 木沢 誠名 氏〕

西南女学院大学観光文化学科の木沢でございます。専門は観光事業論でございます。

皆様方のお手元の、カラフルな「れとろこまち」という資料をちょっとご覧になっていただけますでしょうか。私、実は根っからの観光屋でございまして、旅行会社から航空会社へ参りまして、それから大学の教員になっております。要するに「人集め」しか知らないという人間でございます。大阪の大学から移って参りまして今こちらの方に単身で来ておりますので、自分で「単身タイガース」と言ってますけども、5年前から小倉に参りまして、この関門に…、関門といっても門司港の方なんですけども、着目いたしまして、素晴らしいところです。ただ非常に北九州市はハードはきれいに整備したんですけれども、まだソフトが足りない、という問題意識を市がお持ちでした。私はどちらかというと観光屋ですからソフト屋でございまして、学生たちがこういう大正時代の着物を着付けさせていただく、ということで北九州市さんと話したらですね、ちょうど北九州市さんもこういったこと考えていらっしゃいました。ただ民間でおやりになりますと数千円かかるのですが、学生がやりますので千円でやれる。ということでございます。

今年で5年目に入っております。年間40日間くらい春と秋と営業しております、だいたい年間で40日間で700人くらいのお客様がおり、外国人の方も非常に多くございます。そこで2012年、やり始めてから2年目にですね、この「れとろこまち」にお越しいただく方々と、それからそれ以外の門司港レトロ地区の街頭といいますか、観光地でうろうろしてらっしゃって、かつツアーバッチを付けていらっしゃらない方にアンケート調査をいたしました。いろいろやったんで

すが、今日みなさんにお話するのは、「何時間くらいこの関門地区で滞在なさいましたか」、あるいは「滞在なさるご予定ですか」、「いくらぐらいお使いになりましたか」などということです。

着物利用者と、そうではない団体客でもない方。そこでの結果は、驚くべき結果が出てまいりまして、まず消費額でございますけれども、街頭でアンケート取ったときは平均で 3,577 円。これは一泊なさる方もおられると思います。ところが着物を着た方はなんと 2.31 倍の 8,283 円に跳ね上がるという効果が出てきました。それから、「何時間くらい滞在なさいますか」ということにつきましては、街頭のアンケートは 3.1 時間、着物については 5.0 時間です。かつ着物を着た方は「どこからお越しになりましたか」、という質問では、なんと北九州市を含む県内が 70.4% ですから、着物利用者の 7 割は県内なんですね。要するに、県内の方が門司港に来て、いわゆる私どもの観光の世界でいう「ハレ効果」はほとんどないわけですね。要するに散歩がてらに来た人のわけです。しかしながらこの 70.4% の方々が「れとろこまち」の主要なお客様であるにも関わらず、消費額が 2.31 倍に増える、つまり着物効果なんですね。非常に大きいということがここで実証されました。

そこで、こういう成果を踏まえて、今年から下関市さんが『ぜひ「れとろこまち」を出張でやってくれないか』ということで、これが下関市でしている「出張れとろこまち」です。私どもの学生が、旧秋田商会ビルが 100 周年ということで、ここに畳の部屋がございますので、ここで受付してやっています。最大の呼び物は、下関市の 3 つの大学の外国人の女子留学生をこの着物を着て散歩していただいて、私どもの学生が案内して亀山八幡宮とか色々なところに行って、そこで感じたことや見たことを SNS で、かつ母国語で発信していただくことをやってる最中です。

これはテレビでも他のメディアにも取り上げてられています。そこでひとつのお店にポイントつけてるわけですね。つまり、あるお寿司屋さんでメニューにはないものを出していただいて、それを SNS で母国語で発信した後に、これから 6 か月間でどれだけこのメニューを注文するか、ということです。そのメニューは一般のメニューには出てないんですね。おそらく SNS の写真を見せて「これこれこれ」というふうに母国語で言うだろうと思うんですね。それで SNS の効果を測っているということを今やってる最中でございます。

時間が短いので、課題については第 2 ラウンドで少しお話しさせていただきたいと思います。

【北九州市立大学 南 博】

どうもありがとうございます。それでは続きまして徳山さんの方からお願いいたします。

【北九州市門司港レトロ課 徳山 幸弥 氏】

門司港レトロ課の徳山と申します。私の方は今、観光部門の部署にいるんですけども、3 月までは企画部門で広域連携の担当しておりました。そこでどのようなことをしていたかという、関門連携の方も担当しておりました。下関市と北九州市がどういう行政間連携を今までやってきたかということを簡単に説明させていただきますと、昭和 62 年から両市の市長によるトップ会談を行っております。これは不定期的なんですけど現在まで 13 回ほど両市長によってトップ会談が行われております。

先ほどもお話がありましたが、現在、両市の間は毎日だいたい 1 万人弱の方が通勤通学で行き来しております。下関市から北九州市がだいたい 6 千人強、北九州市から下関市が 4 千人弱、と

いう行き来があります。一体的な生活圏を有しておりますので、いろいろ関門連携というのは、市民の方々は特に意識はしておられなくても、今まで連携してきました。

その主なものとしては、皆さんご存じの関門海峡花火大会。これにつきましては昭和 63 年からやっております、今年も 8 月 13 日に行う予定で進んでおります。そのほかにもちょっと堅いところであれば、関門景観条例、図書館の広域利用、高齢者の施設利用、こども文化パスポート、そういったことをやっております。先ほど少しご説明のありました資料に載っておりますけども、だいたい今現在 40 くらいの事業をやっております。最近では 3 年ほど前に次世代若者交流イベント、いわゆる「街コン」を行いました。一昨年は韓国での関門共同プロモーションなども行っています。

そのような中、第 1 部で報告もありましたが、昨年、総務省が新たな広域連携モデル構築事業というものを募集しまして、そこに下関市さんと北九州市の方で提案したところ、全国で 9 地域の中の一つとして採択されました。その中で行った事業としましては、関門地域経済戦略会議というものを行いまして、この地域がどのように経済成長していったらよいかということを、コーディネータの南先生にも加わっていただいて、活発なご審議をいただきました。

他にも、韓国での「モードツアー国際旅行博」に共同出展したり、公共施設の共同利用の調査をしたりしております。

また、その一環としまして、今の私の所属とも関係あります「門司港レトロ地区と唐戸地区での関門フリーWi-Fi の実証実験」を行っております。これについて触れさせていただきますと、昨年の 10 月から今年の 2 月にかけて、観光客の利便性を高めるために観光施設等に公共の無線 LAN、いわゆる Wi-Fi 付きの自動販売機を設置させていただきました。皆様もご存じのとおり、今、外国人の観光客で日本を訪れる方が増えております。関門地域という単位での数字は無いのですが、北九州市全体として観光動態調査から引いてきますと、平成 23 年が 6.5 万人、24 年が 11.4 万人、25 年が 13.2 万人という形で、外国人の観光客が増えてきております。そこでいろいろアンケート等をしますと、韓国とかが特にそうなんです、スマートフォンの利用が活発でございまして、それを使って観光客の方に Wi-Fi を使っていただいてトップ画面から下関や門司港の観光ガイドに繋がる仕組みをつくりました。利用者は段々と 11 月、12 月、1 月という形で増えてきておりますが、なにぶんモデル事業のため、一応 2 月で実証実験を終えております。この時にシステム導入したのが 11 施設 13 か所でございます。現在も門司港と唐戸地区 7 か所に Wi-Fi を設置しております。このような形で、観光推進に向けて関門連携で取組みを進めております。

【北九州市立大学 南 博】

ありがとうございました。それでは続きまして橋本さんお願いいたします。

【カモンFMパーソナリティ 橋本 みほ 氏】

よろしくお願いたします。下関のラジオ局カモンFMというラジオ局でパーソナリティをしております橋本と申します。私が申し上げる内容は先生方と違ひまして、統計データに基づくものではございませんで、リスナーさんからいただいているメッセージであったり、例えば外に中継、取材に出かけたときにその方から聞く情報・デモに基づくお話とさせていただきます。ご了承ください。

カモンFMは今年の7月で丸17年を迎える下関市市役所の近くにありますラジオ局です。地域密着型ラジオ局ということでラジオの会社としてのモットーは「オールリスナー・オールパーソナリティ」でございます。これはどういう意味かと言いますと、下関全員がリスナーさんでありパーソナリティさんです、ということで、私もパーソナリティではありますが、門司に住む門司出身の一主婦で子育て中の母でございます。

カモンFMに所属しておりますパーソナリティ15人おりますが、ほとんどが主婦、子育て中の主婦であったり、もちろん働き盛り世代の男性もおるんですけども、女性が圧倒的に多いです。私どもがラジオから発信するものは、いわゆる全国区のテレビ、それからAMラジオのような綺麗な日本語で綺麗なアナウンスをして綺麗な情報を伝えるニュースを伝えるということよりも、地域の情報をより身近に感じていただく、今起きていることを伝えるということを目的としております。私は北九州で育ちましたけれども中学高校と下関に通いまして大学卒業後も下関で働いておりますので、北九弁と下関弁のバイリンガルだと私自身は思っております。ですので、番組の中では下関弁を使ってコーナーを進めていくこともありますし、リスナーさんから頂くメッセージには方言が混じっているものがとても多くあります。

その中で最近もっとも下関と北九州の違いといいますか、「あ、ここか」と思ったことが一つありました。昨年、下関駅がリニューアル致しまして、シネコン、大型映画館がオープンいたしました。その時に映画の情報をラジオから発信したんですけども、リスナーさんの多くが、今まで下関に映画館があったんですけども大型のシネコンではなかったために小倉で観ていたものを「やっと地元で観ることができる」という意見をとても多く寄せていただきました。そのことによって私達も北九州の情報をこれまでも発信しておりましたけれども、より下関の地元の情報として求められているものは何なのかなと考えました。日々放送する上で、求められていることを考えながら話しておるんですけども、

じゃあラジオの聴取率、どこでどなたが聴いてくださっているのかというのは、正直わかっておりません。聴取可能エリアは北九州市ですと門司区、それから小倉北区です。下関市内は全域、それから山陽小野田市でお聴きいただいております。ただ現在ラジオというのはとても便利でして、世界中のラジオをスマートフォンのアプリで聴くことができます。ですので、下関にいても下関の情報が要らない人間は下関のラジオを聴く必要がありませんので、逆にいいですと全国どこからでも下関の情報をお聴きいただける、という状況の中で、じゃあ下関の何を伝えるのか、そして下関以外の情報をどの程度伝えるべきなのか、というのが私たちの課題でもありますし、どういことを求めているのかということを探している現状です。

先ほど木沢先生のお話にありました大正袴なんですけれども、下関の旧秋田商会で私も体験をいたしまして、大正袴を着て…、ラジオなのですが袴を着て放送しました。その様子を写真に撮りまして、フェイスブックにアップしましたところ、北九州の方ももちろん全国の方から反応がありまして「今度の土曜日行ってみようと思います」という声もありました。

ですので、ラジオでの発信ではありますがラジオ以外の発信もやっていかなければいけないんだなあというところ、それから関門のエリア自体がもうひとつの地域であることを認識していかなければいけないんだなあということを日々感じているところでございます。以上です。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございました。続きまして宗近さんお願いいたします。

〔山口経済研究所 宗近 孝憲 氏〕

宗近と申します。

配付資料に、「若者男性の学歴」という4枚のグラフをお付けしています。増田レポートにしろ地方創生にしろ、東京一極集中が大きな問題であるということが言われているんですが、左上にその東京の若い男性の学歴をみたグラフがあります。全国と比べると大卒が5割以上いて多いですが、高卒はそこまでは多くない。つまり、若い人が東京に集中しているというのは、高卒だろうが大卒だろうが皆こぞって集中してるわけではなく、大卒が集中していて、高卒はそんなに集まってるわけではないのです。だからこうした構成比のバランスになっています。みんなが大学に行くようになって、大学に行って卒業したら東京に就職してしまっただけで帰って来ない、というのが東京一極集中の原因であることが、このグラフ一枚でわかると思います。

右のグラフは福岡市です。福岡市も一緒なんです。福岡市はダム機能を発揮していて、これで若者が県外に流出するのを止めてくれているわけなんです。要は、動くのは「大卒が動く」ということで、その大卒の職場が福岡にあるので、そこがダム機能を発揮できており、だから人口も増加し続けているということになっているのです。

そうすると、ダム機能を発揮しているところがあればその周辺はそこに通うこともできますし、そのダム機能を活かして周辺も連携して地域をつくっていくという広域の考え方ができる、ということになるわけなんです。けれども、福岡市と違って、左下のグラフの北九州市の場合は、むしろ高卒の方は全国平均より多く、大卒が全国平均より少ないという状況です。つまり工業地帯ということで、高校卒業して工業地帯で就職するような時代はどんどん人が集まって人口も増えたのですけれども、皆が大学進学行くようになって大卒として就職しようという時代になった時に、北九州市の場合は職場が少なく、むしろ政令指定都市でありながら北九州で高校を卒業した子さえ結局は外に出てしまっているというのが現状になります。

これは隣の下関市も全く同様です。

つまり、下関市からみると、福岡市の隣にあるという連携の仕方と、北九州市の隣にあるという連携の仕方は意味が違ってくることに当然なってきます。ダム機能を持った都市を中心にした連携ではなくて、結局、同じエリアで同じ立場で、もっと広域的に総合力を発揮していくという連携になってくるだろうと思うわけです。

ではどういったエリアなのかというと、東九州道ができ、山陰道もできるという状況の中で益々、本州と九州の結節点、あるいは東アジアとの日本とのゲートウェイという位置づけにおいて同じエリアであるということになります。「片方が欠けると結節点に成り得ない」ということで、両方でやっていかななくてはならないというのが、地方創生の中で地域特性を活かした地域の振興方策だろうと思います。

どちらが欠けてもダメで、両方でやっていかななくてはならないという状況の中ではありますが、その取り組みについてはそれほど十分できていないのではないかと、ということが現状の課題ではないかと思っています。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございました。みなさん非常にコンパクトにまとめていただいて大変ありがたく存じます。皆様それぞれのお立場から、関門連携に現在取り組まれている内容ですとか、課題についてお話をいただきました。今の各パネリストの皆さんのお話をお聞きになってどのように感じたかを、宮下さんにお願いします。

〔北九州市立大学 宮下 量久〕

宮下です。私はちょうど1年前に北九州市に来たばかりでして、今日お話を聞いて、関門連携に皆さん非常に熱心に取り組まれているということがわかりました。下関市と北九州市で切磋琢磨して、いい所は真似するという善政競争をやってほしいと思いました。

個人的な反省を言えば、私は前職でPHP研究所というところにおりまして、道州制の区割りとかを考えておりました。100パターンくらい考えたのですが、この関門地域をどう線引きするか非常に悩みました。最終的には社長命令で「関門で切ろう」ということになってしまったのですが、そうした発想が国の発想なんだな、と非常に反省しました。

先程お話しいただいたような連携の取り組みが、こうした機会に、より市民の皆さんに広まればいいな、と思います。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございました。

3. 論点② 今後の関門連携充実にに向けた展望や期待

〔北九州市立大学 南 博〕

それでは続いて2つ目の論点「今後の関門連携充実にに向けた展望や期待」に移ります。現在の皆様の取り組みや他の視点なども踏まえて、今後の関門連携充実にに向けたお考え等についてお聞かせいただければと思います。まず木沢さんの方からお願いをいたします。

〔西南女学院大学 木沢 誠名 氏〕

先ほど申し上げた「れとろこまち」の目的は、滞在時間の延長と観光消費額の向上です。10万人が日帰りで来るよりも、5万人の宿泊客の方が消費効果は高いわけです。どうやって滞在時間を延ばすのかということ、今仕掛けているところでございます。

そこでひとつ課題があります。例えば観光には「ラケット理論」というものがありまして、ラケットの「柄」が長いほど「面」も長いということです。遠くから来た人ほど、周遊する範囲が広いということなんですね。それで、パンフレットを幾つか持ってきました。例えばこのパンフレットはハングルですが、ここに小倉と下関がちゃんと載っているんです。作成したのは民間のようですが、協賛が北九州市と下関市になっています。一方、これは北九州市が作っていらっしゃるハングルと英語と中国語のウェルカムカードですが、これには北九州市しか載っていません。それから、これは北九州の観光協会が作られたと思うのですが、北九州しか載っていません。そ

れからこれは関門を合わせた地図ですが、JR九州が自分達の路線ではない下関をちゃんと載せています。このように実に様々です。

行政の方々が色々と連携してきたのわかりますけども、観光客にとっては実は下関が山口県なのか福岡県なのかとかは、全く何の意味もないのです。「広域」と行政の方はおっしゃりますが、この「関門」という海峡のロマンを中心にして、ぜひとも誘客することをやっていただきたいと思います。

そうしますと、今「ラケット理論」と言いましたが、例えば福岡市の方々がぶらっと来て関門と萩に行くことは普通ないわけです。しかし関西人は、萩と関門を周ります。ラケットの柄が長ければ周る所が広いということです。そういう意味では、韓国マーケット、中国マーケットに出すときの関門、福岡あるいは山口の萩などのエリアと、関西あるいは東京に出すときのエリアは当然違うわけです。そこをしっかりとターゲットを絞って絞って絞り込んでいかなくてはなりません。どこにはどんなものがある、ということ連携して出していないといけません。むしろ中国人や韓国人には、関門プラス九州全部、あるいは萩や広島といった出し方が効果的かなとも思います。

【北九州市立大学 南 博】

ありがとうございました。それでは続きまして徳山さんお願いします。

【北九州市門司港レトロ課 徳山 幸弥 氏】

今の木沢先生のお言葉、かなり心に染みております。私どもも決して一緒にやっていないというわけではありません。関門海峡観光推進協議会を平成9年から創設しており、本日の配付資料の「かんもん海峡ウォーカー」などを作成し、「関門」という形で、今、PRしております。

また、インバウンドを狙って台湾とか韓国の方にもプロモーションをかけておまして、その中で、先ほど御指摘のあったように観光客は門司港レトロ地区だけに来ようと思ってるわけではないのです。東京、関西の方が九州の方に来てどこか回りたいという時、門司港レトロだけで滞在時間を増やすのは難しいので、唐戸の方に行っていただいて回遊性をもたせて長く滞在していただく、というのが現在課題になっております。

また、門司港、下関だけではホテルも少ないので、滞在は小倉でも良いですし、山口の方は温泉もありますし、そのあたりを繋いでいって一つひとつの点が繋がって線になって、そして面のように広がっていく、そういったことによって、この地域の経済が活性するのではないかと考えております。

今考えておりますのは、先ほどの研究報告にあった新たな広域連携とも関連しますが、北九州市と下関市だけの連携では弱い面があります。下関市は山口県の中の一番大きな市、中核市であり、山陽小野田市や長門市と連携していくことも必要になってくると思います。北九州市も福岡県北東部地域、特に中間市・遠賀郡4町などとは古くから繋がっておりますので、そういった各地域のリーダーを両市が務めつつ、その2市と一緒に力を合わせてやっていくことが重要かと思っております。関門だけではなく、この地域全体で広域連携し、地域を活性化していきたいと思っております。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。それでは橋本さんお願いします。

〔カモンFMパーソナリティ 橋本 みほ 氏〕

私が行っている仕事は、住民の皆さんとの会話、ラジオを通しての会話だと思います。ラジオ局を運営するにあたり、広告収入はとても大きな要素になります。下関のラジオ局ということで、スポンサーさんはほぼ下関、地元のスポンサーさんです。そうすると、番組を作る上でスポンサーさんのイベント、催事をご案内する機会がとて多くなります。「じゃあ北九州は？」となると、コミュニティFMは北九州にも幾つもありまして、そちらで地元の事を放送しています。この両市のコミュニティFM局が、同じように同じ量だけ双方の情報を放送できれば、もっと交流が深まるのかなあと、日々感じています。

リスナーの住民の方は美味しいものがあれば行きますし、買いたい物を売っていれば関門海峡を渡ると思います。放送していて、北九州の情報を流した時に「おもしろかった」「行きました」という下関の方もいらっしゃいますし、北九州で聴いてくださってる方が「この前、下関に行きました。こういうところが面白かったです」という感想をラジオに寄せて下さることもあります。

行政の皆さんは本当に連携をされているのですが、イベントを発信する場所はやはりそれぞれの地域なのかなと思います。例えば下関市の観光課さんからいただくチラシ、下関の色々なお店からいただくチラシをもとに私達は放送する、ということが前提としてあります。ぜひこの場をお借りして北九州のみなさんをお願いしたいのは、下関にも北九州の情報をどんどんいただきたい、ということです。私も関門トンネルを毎日通って仕事に行っておりますので、もっともっとたくさんの交流ができ、ラジオを通してご案内ができればいいなと思います。

最後に、「カモンFM」の「カモン」は、「関門」と掛っています。「かんもんFM」ということで「カモンFM」、という洒落になっておりますのでぜひ覚えていただきたいと思います。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。それでは宗近さんお願いします。

〔山口経済研究所 宗近 孝憲 氏〕

結論的には一つだけお話ししたいのですが、やはり「下関北九州道路」いわゆる「関門海峡道路」が必要だろうと思います。

先ほどお話ししましたように、どちらの市が欠けてもダメで、両市で広域に展開していこうというときに、現在は北九州市の東側のルートしかない道路交通の状況ですので、どうしても北九州市の東側とだけの連携に片寄ってしまいます。これは、アンケート調査結果でも北九州市民の東西に分けると明確にはっきり意識の違いが出ますし、通勤の面では下関市との間で通勤している人は北九州市東部の人が圧倒的に多く、東西で全くボリュームが違います。

このように、今はある意味、「片肺飛行」のような形で、機能が半分しか発揮できていません。「下関北九州道路」ができると両肺飛行できるようになって、そうなるこそ初めて2市で本当に広域的結節機能を活かして新たな大卒者の雇用の場も生まれ、新たな地方創生というものがこ

の地域で起こるのではないかと思います。そうすると、この地域がダム機能を発揮できるような地域になれるのではないかと思います。

こうした流れで考えても、やはり「下関北九州道路」は必要であり、ぜひ道路ができると良いなあ、と思っております。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございました。各パネリストの皆様から今後の展望や期待ということでお話しをいただきましたが、お聞きいただいでどうお感じになられたか、水谷さんをお願いします。

〔下関市立大学 水谷 利亮〕

先ほどの宮下先生の研究報告もそうでしたけれども、施設側と住民のギャップ、これも永遠の課題であり、行政の課題としてもあると思うのですが。それは置いておいて、下関市民と北九州市民が相互に感じている意識のギャップが先程から引っかかっております。

皆さんのお話も聞きながら、「下関市民から見ると北九州市は結構大事」なのだろうと思います。私は5年前に土佐から脱藩して長州に来たのですが、やはり小倉の方が仕事やプライベートで行くときにわくわくするのですね。映画館もたくさんありますし、帰りに新幹線に乗る時に駅の立ち呑みで美味しい魚と酒を呑んで帰ってくる、これも非常に楽しみで、なんかわくわくするんです。でも、同じように「北九州市民が下関市にどれだけわくわくを感じているのか」という点については、ちょっと疑問に思っております。

ひょっとしたらこれから連携を進めるためには、経済規模とか各種指標には違いはあるのですが、「対等性」が大事じゃないかなと思うんですね。下関市民が北九州市に感じている魅力に比べて、「じゃあ、北九州市民がわくわくするような下関の魅力って何？」と考えると、改めてクエスチョンマークが出てきます。

こういった点を皆さんがどう思っておられるのか、というのをお聞きしたい。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございました。本来であれば、今の水谷さんの問題提起から議論を更に深めていきたいところではあるのですが、時間が限られておりますので、別の機会にさせていただきたいと思います。

4. 質疑応答

〔北九州市立大学 南 博〕

それでは、せっかくお集まりいただいた皆さん方から、パネリストの方にご質問等があればぜひ頂きたいと思います。ご質問のおありにある方は、挙手をいただけますでしょうか。

〔来場者からの質問1〕

感想ですが、今の水谷さんの話に関連します。

私は1年ちょっと前まで北九州から下関に通っていた者ですが、先ほどの市民の「わくわく感」というものは、少し言い換えると「片思い」という感じがします。下関から北九州に片思いをする人はかなりいるけども、逆はほとんどいないのではないかと。これは連鎖になっているのではないかと思います。北九州から福岡に「片思い」する人、あるいは「わくわく感」を持っている人はたくさんいるけども、逆はあまりいないのではないかと。では福岡は東京あるいは他都市を見ているのではないかと。こうした「片思いの連鎖」という状況の中で、連携というのを一体どうしていくかというのが一つの問題ではないかと思うのですが、そのあたりをお聞きしたいです。

【北九州市立大学 南 博】

ありがとうございました。ただいま「片思いの連鎖」の中でどう連携していくか、というご質問がありましたが、パネリストの皆さんいかがでしょうか？ では木沢さんお願いします。

【西南女学院大学 木沢 誠名 氏】

観光の分野では、基本的には「日常と異なるものを求める」ということがあります。明後日から学生を連れて東峰村にグリーンツーリズムで行くのです。学生たちはわくわくしてます、ホテルを見ることができる、小川で足を洗える、ということですね。

おそらく北九州市民は福岡に恋をしている。それは自分達に無いものを求めているからなのです。ですから、小倉から見て下関の繁華街は面白くないのです。私は大阪や東京に住んでいたのですが、福岡の天神なんて、本当に只の「大阪・東京の小型」ですよ、面白くも何ともない。ですからそういう意味でいきますと、北九州あるいは小倉にないものを、下関は非常に広いわけですから、都市住民が感じたい「新奇なもの」をきちんとアピールしていくということがよいのではないかと、思います。

【北九州市立大学 南 博】

ありがとうございました。その他ご質問ご意見のある方いらっしゃいますでしょうか。

【来場者からの質問2】

北九州の持っている内部資源の「産業」というキーワードについて、今日お話されてる観光との関係でどう考えるか、非常に大事かと思えます。どちらかというとなら産業観光については、今年、安川電機さんとかTOTOさんが色々と施設を整備していますが、「点」の状況だと思えます。今後の見通しとして、そういった「点」を、下関市と一緒に産業界のコースをつくるといったような動きが見えているのかどうかをお教えいただきたいなと思えます。

【北九州市門司港レトロ課 徳山 幸弥 氏】

私の方は産業観光は少し詳しくないのですが、皆さんご存じのように世界遺産登録に向けて活動が行われておりまして、多分7月初旬くらいに八幡製鐵所の旧本事務所などが登録される予定です。まだ正式には決まっていますが。また北九州は産業観光という形で、滞在型の観光客を呼び込もうということで工場夜景に数年前から取り組んでおりますし、先ほどおっしゃった安川電機のロボット村やTOTOの新しいミュージアムの整備が進んでいます。こうした動きと今後

どういった形で連携していくかを、市の観光にぎわい部で現在色々と検討しているところです。また、MICE 推進課という組織を作りましたので、数年先には北九州スタジアムもできますので、大きなイベントなどを持ってこようと動いております。産業観光につきましては、あらゆる面であらゆることが観光に繋がるような形で今動いているのが現状でございます。

下関市の方も造船や漁業の盛んな街でありますし、下関市が合併して昨年でちょうど 10 年になってると思うのですが、今色々と動いているはずですので、連携できればと思っている状況です。

〔山口経済研究所 宗近 孝憲 氏〕

産業観光だと、両市で産業の質が違い、コンテンツ的に両市揃った方が良いという理由が付けにくい面はあると思います。

もちろん下関市の唐戸と門司港はものすごく盛り上がっているわけですが、それはある意味、観光地として運命共同体だから、という意識があるからだろうと思います。MICE では先日、日本糖尿病学会という 1 万 2 千人規模の学会が下関で開催されましたが、それは事実上、北九州市と一緒にやったような感じです。ビジネスホテルとかの関係で、両市で連携しています。それもやはり運命共同体意識があるから一緒にやる、ということをやっているんだろうと思います。

水谷先生からの問題提言にも関わりますが、両市で「自分達は運命共同体なんだ」、「ロケーション的にも地勢的にも結束して運命共同体でやっていかななくてはいけないんだ」という意識を両市民が持てるようになれば、かなり「わくわく感」についても意識が変わってくるのではないかと思います。こうした点がこれからの課題になるのではないかな、と私はそんなふうにも思っています。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございました。まだまだ色々と議論を深めていきたいところなのですが、定刻となってまいりました。

今、様々な課題や今後の展望について各パネリストから発言がありました。今後、関門地域共同研究会においては、こうした地域の課題、あるいは要望等に応えるべく、様々な調査研究を進めていきたいと考えております。

それでは以上をもちまして、ミニシンポジウム「今後の新たな関門連携に向けた展望」を終了いたします。どうもありがとうございました。



写真 ミニシンポジウムの様子